

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 2 日現在

機関番号：34315

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2016

課題番号：25380715

研究課題名(和文)街頭放送の歴史社会学的研究

研究課題名(英文)Historical and sociological study of the broadcasting on the street

研究代表者

坂田 謙司(SAKATA, Kenji)

立命館大学・産業社会学部・教授

研究者番号：70388081

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,400,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の目的は、音声による街頭の宣伝放送である「街頭放送」の社会史を明らかにすることにあった。特に、現役の施設が多い北海道の街頭放送を中心に調査・研究を行った。研究方法は、新聞記事を使った歴史・社会的な事実確認とヒアリング、関連資料の探索という歴史社会学的手法を用いた。その結果、街頭放送は1945年末に東京有楽町に初めて登場し、全国へと広まっていった。しかし、都市部の街頭放送は他の都市的な音との重なりの中で騒音源として捉えられ、減少していった。一方、北海道の街頭放送は1947年に札幌中心部に登場し、宣伝メディアとしてだけでなく地域情報メディアとしても機能し、今日に至っていることが分かった。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this study had that I clarified social history of "broadcasting on the street" that was the advertising broadcast on the street by the sound. Particularly, I researched it mainly broadcasting on street of Hokkaido Prefecture with many active facilities. The study method used the fact checking that it was like the history, using the newspaper article and interview to facilities, technique of the historical sociology called the search of the related document. As a result, broadcasting on the street came up for the first time in Yurakucho in Tokyo prefecture at the end of 1945 and spread out to the whole country. However, broadcasting on the street of the urban area was caught in the heap with other city-like sounds as a noise source and decreased. On the other hand, broadcasting on the street of Hokkaido came up in the Sapporo center in 1947 and functioned as the local information media only as the advertising media and understood that I continued up to the present day.

研究分野：社会学、音声メディア、地域メディア、メディア史、社会史

キーワード：街頭放送 有線放送 屋外広告 宣伝・広告 地域メディア 北海道 メディア史

### 1. 研究開始当初の背景

われわれが日々生活している社会には、TVや新聞などのいわゆるマス・メディアだけではなく、普段の生活のなかに溶け込んで気がつかないような小規模なメディアも数多く存在している。あるいは、インターネットに代表されるグローバルな情報共有の実現によって、情報の地理的・地域的限定性の価値が薄らいでいる一方で、現実の世界には個人メディア、地域の限定性を持ったメディアが数多く生み出されては消えて行き、あるいは長い年月を経て今日でも日常生活のなかで活動を続けている。

研究代表者は、常にこのような日常生活に溶け込み、意識されない「自明性」に疑問をもち、その自明性が生み出されたプロセスを解明することを研究の目的としている。このような研究姿勢に基づいた研究対象が、本研究課題のテーマとなっている「街頭放送」である。

街頭放送は、街頭に設置されたスピーカーから独特の音声による宣伝(CM)放送を行っている地域密着の音声メディアである。街頭放送のある地域・地元の人びとにとっては、毎日の生活のなかで自然に聴こえてくる環境音に近い存在であり、屋外において強制的に聴かされるという点では、車や工事に伴う騒音に類似した存在でもある。その点から言うと、街頭放送の存在はむしろ地域外部から来た人間の方が気がつきやすく、その一方で外部の人間には情報としての価値は小さいとも言える。研究代表者も、過去の研究調査で訪れた地域でその存在に気がついたものである。

この街頭放送について調べてみると、これまで広告史、地域メディア史、放送史のいづれからも研究アプローチがなされていないことが分かった。そのため、研究の対象としてその歴史的な経緯を含めて、社会との関係を中心に後世に残す学術的な意味があると考えたのである。

### 2. 研究の目的

上記のような背景の下に、街頭放送がいつ頃、どのように生み出されたのかという誕生の経緯、その後の社会における受け入れられ方と位置づけ、社会における評価、機能などを明らかにし、日本社会において厳然と存在した音声メディアの社会史の一つとして位置づけることを研究の主要な目的としている。

また、現在も現役で稼働している街頭放送は、地域とどのような関係を切り結んでいるのか、そのことが、歴史的にどのような意味を持つのかについても明らかにしている。

### 3. 研究の方法

研究の方法としては、まず街頭放送に関する公的な記録を調査し、国の政策における位置づけを確認した。同時に、先行研究をレビ

ューし、どのような目線・立ち位置での研究が行われているのかを確認した。

その他に、社会的な認知と位置づけを調べるために、主に新聞紙面における街頭放送に関する記事を確認した。対象は、全国紙、ブロック紙、地方紙、地域紙であり、オンライン・データベース検索及びマイクロフィルムを用いた実紙面調査を実施した。

そして、現在稼働中の街頭放送施設及び関係者への聞き取りを実施。その他、広告関係、騒音関係、都市と音、地域メディアなどの関係論文の確認、その他の二次資料の発見に努めた。

### 4. 研究成果

(1) 公式な文書における街頭放送の記述は、郵政省が発行した『続通信事業史』第6巻「有線放送業務」中に登場する。街頭放送の説明として、「昭和二〇年頃、新しい宣伝広告の媒体として、街頭放送施設(街頭に設置した拡声器に有線で広告等を送信する施設)が出現し、戦後の世相を反映し都市のアクセサリ―として全国各地の都市に急激に普及していった。<中略>昭和二〇年十二月に東京都の有楽町にはじめて設置され、以来自由経済の復活によって、商品の広告宣伝に広く利用されるようになり、全国各地の都市に広がっていった」と記されている。

街頭放送とは、有線で街頭に設置した拡声器(スピーカー)を結び、放送施設から送られる音声の広告宣伝を行う施設であり、1945年12月には東京・有楽町に登場していたことも記されている。つまり、戦争終結後の荒廃した東京・有楽町に、GHQ進駐後の僅か3ヶ月後には街頭放送が登場していたことになる。

今回の調査ではこの記述内容を直接裏付ける資料は発見できなかったが、銀座にあった街頭放送の様子を示す資料を発見した。田中純一郎『宣伝・ここに妙手あり』には、以下のような街頭放送に関する記述がある。「パリの広告塔からは音楽が流れたり、美しい女性のアナウンスが聞こえるので評判だったが、昭和二十二年の春から、東京にも銀座の街角に丸い広告塔が建ち、そこから音楽やアナウンスが聞こえるようになり、戦後の東京が、急にヨーロッパ並になったとおどろかされたものです」と、銀座の街頭放送の様子を記している。

また、1947年11月から毎日新聞に連載された丹羽文雄の「人間模様」にも、銀座にあった初期の街頭放送に関する描写が登場する。戦争から復員したばかりの主人公が東京銀座数寄屋橋付近を歩いていると、どこからともなく女性の話し声が聞こえて来る。あたりを見回すと、2メートルの高さの「広告塔」から声が出てくるのがわかるというものだ。「いまでは広告塔が声を出してもだれも不思議に思わないが、屋外広告が資材不足、電力不足に悩まされていた終戦直後と

しては、新しいアイデアだったに違いない」と、戦後の荒廃した街中に登場した広告塔というアイデアに感心を示している。

これらの資料から、最初期の街頭放送は現在の街頭放送が利用している電柱や街路灯に設置されたスピーカーから音を流す形式ではなく、放送専用の独立した高さ2メートルほどの「塔」として建っていたことがわかった。そして、この放送塔型の街頭放送は戦後の屋外広告としては目立つ存在だったにも関わらず、戦後広告史研究のなかでは特に大きく扱われてはいないこともわかった。

### (2) 騒音と街頭放送

街頭放送は屋外において音声による広告放送を行う媒体であり、他の屋外音に消されないような音量を必要とする。戦後復興における建設工事や交通量の増加など、日常生活における音は、種類だけでなく量も大きさも増えていった。また、新規さによって注目されたことで同業他社が参入するようになり、互いに大きな音量で対抗していたことは容易に推察される。当初は新規な音の宣伝媒体として受け入れていたが、次第に避けることができない騒音へと変わっていった。

先出の『宣伝・ここに妙手あり』には、「街頭放送がはじまった頃は、音やアナウンスの出し方に工風（ママ）が足りず、高円寺付近では広告放送の高音に附近の住民から抗議が出て、軽犯罪法で処罰されたことも、それ以来警視庁では街頭放送の音量を計量して、これを抑制するようにして居り、一方放送技術も改善されて、今日に至っています」と、街頭放送と騒音との関係も記されている。

1950年12月11日付け読売新聞に「騒音は軽犯罪 音の暴力街頭放送取締り新判例に力づく業者の自粛促す」と題する記事が掲載されている。「かねて懸案の街頭宣伝放送に対し全国初の断を下したもので。この事例にみて警視庁は保安課では自由業者の利益より多数都民の福祉のためという観点から断固業者の自粛を待つことになったもの」と、街頭放送業者に対する取り締まり側の姿勢が記されている。そして、その後も街頭放送と騒音との関係は、1960年代から70年代にかけて新聞紙面上に数多く登場している。戦争によって荒廃した街に登場した新規な塔と音声の宣伝メディアは、登場直後こそ好意的に捉えられていたが、都市部特有の重なり合う音の洪水に飲み込まれ、抗いきれなかったと考えられる。

### (3) 北海道の街頭放送社会史

本研究では北海道の街頭放送を取り上げているが、北海道放送事業協同組合が1962年に編纂した『街頭放送指導』という会員向け小冊子に、「有線放送事業について」と題する北海道街頭放送の歴史的経緯が書かれた文章がある。「終戦後の混迷未だ去りやらぬ昭和二十二年六月、札幌の中心街、四丁

目十字街の一角に、風変りな六角形の広告塔が建ち、塔の先端のスピーカーから、音楽の間を縫って今まで類例のなかったコマースシャルメッセージが流された」と放送塔として始まった札幌の状況が記録されている。

札幌の四丁目とは大通公園とススキノの中間に位置する中心部で、北海道の街頭放送は銀座の街頭放送と同様の六角形をした「放送塔」形式で始まったことが分かる。そして、『続通信事業史』が示す最初の開設時期のわずか2年後には、札幌の町に登場していたことになる。『街頭放送指導』本文中には当時の街頭放送事業者の状況も記されており、「全国六百有余、北海道でも五十余りの同業者が生まれた」と全国的なブームになっていたことが明らかとなっている。

このように、街頭放送の始まりは放送塔形式であったが、その姿を記録した資料は僅かしか発見できていない。北海道小樽市の街頭放送「北海道時事報声社」は、写真による往時の姿を確認できる数少ない街頭放送施設である。「北海道時事報声社」は1947年9月に設立され、現在のJR小樽駅前のバスターミナル付近にあった放送塔から宣伝放送を行っていた。写真から判明した構造は、以下のようにになっている。全部で三層構造の放送塔は、第一層が四角い小屋で内部はスタジオ兼事務所と思われる。第二層は三段の屋外広告板が貼られ、「親切第一三菱銀行」「インイミン」「大光食品」などの文字が読み取れる。第三層は煙突のような形状で、外側にスピーカー（拡声器）が1つ確認できる。写真の背景には当時の小樽駅舎が見えており、人の往来の多い場所に設置されていたことがわかる。

小樽市の広報誌『広報おたる』連載の「小樽文学散歩」第31話には、「街頭放送よもやま話」と題して北海道時事報声社の歴史が書かれている。「街頭放送は、小樽市民にとって、なじみの深い『街の案内』ですが、広告媒体の多様化や市街地の音声規制などにより、全国的には多くの街角から消えつつあります」と、地域に根ざした存在であった。放送内容は宣伝以外に「ニュースや火災速報なども放送していましたが、時には事件の報道と捜査への協力や呼び掛けなどを行うことがありました。また、市議会の議場に放送機材を運び込み、議会の生中継を行ったこともあるそうです」と、現在のコミュニティFMやケーブルテレビなどの地域密着メディア的な役割を果たしていたことが明らかとなった。

### (4) 地域広報メディアとしての街頭放送

地方の街頭放送に期待された初期の役割として自治体広報機能がかったことは、小樽の北海道時事報声社の事例でも紹介した。このような個別商店や商品の宣伝（CM）以外の役割は、北海道の他の街頭放送でもみられる。例えば北見市の場合、1948年8月2

4日付けの北見新聞「放送より音楽が多いアナ君廣告なくて手持無沙汰」と題する記事では、北見廣告放送協會が放送塔から放送を行っており、その開局経緯と目的として「この放送塔は始めは北見市役所の提案でこれにより各官公署の市民え(ママ)のお知らせ配給だより等をやるうとくわだてたが何せ豫算と人員の整備がつかず北見廣告放送協會にまかせた形になっている」と、当時の北見市役所の広報媒体として役所主導で始まったことがわかる。そのために「主眼はあくまで市民え(ママ)のお知らせ文化便りを第一とし他の商店廣告は第二とした」と、東京有楽町や数寄屋橋、高円寺などの街頭放送とは異なる実践が行われていた。

また、1949年5月31日付け北見新聞には「街の放送局 きのおKHK放送開始」という記事があり、「この朝八時半開通式には市内官公衛、電気関係、報道関係などの、御歴々が参集して、伊谷市長、草谷管理部長片桐税務署長の初放送があった」とKHKという街頭放送の開局を伝えている。このKHKが1年前の北見廣告放送協會と同一組織なのかは判然としないが、市長の放送や報道関係者の参加などから、その期待の大きさと北見市との密接な関係が窺える。そして、同年9月28日付け北見新聞には開局後のKHKの様子が記事になっていて、経営状況の苦しさと共に放送内容が紹介されている。「もともと榮利を目的としてやれる事業ではなく、市民の要望によって生まれたものであるから維持費をまかない得る程度の経営状態です」と当初から利益を上げられる事業ではなかった上に、「官公署の告知、傳達放送は全部無料でサービスしているが、これが全放送に占めるパーセンテージが六〇-七〇ということも見てもわかると思うが、タダ放送が多い」と、地域広報メディアが主な役割であることを示している。

このような自治体の広報メディアとして街頭放送が使われた例は、都内の街頭放送記事では発見することができず、地方街頭放送の特徴と推測される。では、なぜそのような差が生まれたのだろうか。東京大学新聞研究所が地域メディア状況についてまとめた『地域的情報メディアの実態と問題』の「自治体広報の問題状況」によれば、自治体広報は戦後の新しい地方自治制度に加え、1947年にGHQによる官公庁の「PRオフィス設置」勸奨が始まりとされている。以降、地方自治体が政策や情報を住民に伝えるための広報媒体として、北見市のような街頭放送の利用が行われていたと推測される。

また、自治体広報だけでなく、地域ニュースを伝える音声メディアとしての利用もあった。芦別市にある「芦別放声社」は、地域新聞社「空知タイムス」の放送部門として1950年に設立された。現JR芦別駅前を中心として設置されたスピーカーから、「空知タイムスより芦別町のニュース」「NHKニ

ュース」「官公庁よりの啓蒙、お知らせ」「娯楽放送・催しもの案内」「一般廣告放送」が放送されており、特にニュースに関しては定時放送されていた。また、帯広市にある1949年8月設立の「時事タイムス放送社」は、地域紙が母体であったことなどから初期においてはニュースを中心とした編成を行っていたことも明らかとなった。

#### (5) まとめ

このように、街頭放送は戦後の荒廃した街角に建つ放送塔と言う新奇な宣伝媒体として捉えられていたが、街を行き交う人びとに向かって音声で情報を伝える「強制聴取」という構造から、ほどなく騒音というネガティブな認知と変化した。都市部と地方部でも基本構造は同じであるにも関わらず、都市部は減少(消滅)し地方部では現在でも放送を続けている。

この差が生まれた理由として、以下の理由が考えられる。一つには、都市部という「多様で多量な音の環境」であろう。戦後の復興建設ラッシュや交通量の増大など、数多くの音の重なりが街頭放送のポジティブな面を消し去ってしまった。また、民間放送が始まり、音の宣伝媒体としての新しさやクオリティの課題も表れてきたと考えられる。

二つ目は、メディア環境の差があげられる。東京は放送を含めてメディア環境が潤沢で、地方のようなメディアへの希求が薄かった。その一つの表れとして、地方における街頭放送は行政の広報媒体として期待され、地元ニュースを提供するメディアとしても活用されてきた。その結果、街頭の音に地域性が組み込まれ、単なる宣伝媒体を超えた「地元の音のメディア」という存在になったのである。

#### <引用・参考文献>

- 郵政省編『続通信事業史』第6巻、前島会、1951年、603頁。
- 田中純一郎『宣伝・ここに妙手あり』、四季社、1958年、73頁。
- 槌田満文『文学にみる広告風物詩』、ブレジデント社、1978年、157-158頁。
- 東京大学新聞研究所編『地域的情報メディアの実態』東京大学出版会、1981年、131-133頁。
- 坂田謙司『「声」の有線メディア史：共同聴取から有線放送電話を巡る「メディアの生涯」』、世界思想社、2005年。

#### 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計1件)

坂田謙司「街頭放送の社会史 -北海道の街頭放送と社会の関係-」『立命館産業社会論集』、査読あり、第52巻第4号、2017.3、p 19-36

〔学会発表〕(計1件)

日本マス・コミュニケーション学会 2017年

度春季研究発表会（個人発表）「地域メディアとしての街頭放送」2017年6月17日 新潟大学（新潟県・新潟市）

6．研究組織

(1)研究代表者

坂田 謙司 (SAKATA, Kenji)  
立命館大学・産業社会学部・教授  
研究者番号：70388081